

部 長	高 木 花 織
研究主任	鈴 木 莉 久
部 員 数	29名

1 研究主題

本は友達
～本とつながる仕掛けづくり～

2 はじめに

本研究会では、これまで、図書室を「読書センター」としての機能だけではなく、「学習センター」や「情報センター」としても活用していくために、図書室や図書資料とタブレットを組み合わせ、どのように利用していくかに焦点を当てた研究を進めてきた。しかし、様々な情報メディアの発達・普及により、教育現場においてもタブレット等 I C T 機器の導入が進み、さらなる読書離れが指摘されている。このような状況下において、本に親しむ児童生徒を育てるためには、本とつながる「仕掛け」が必要ではないかと考えた。そこで、「本は友達一本とつながる仕掛け作り」を研究主題とし、児童生徒が本に親しみ、自ら学ぶ力を身に付けるための実践を中心に据え、研究に取り組んだ。

3 研究経過

全体会と学年別部会の2部構成で会をもち、研究を進めた。学年別の部会は基本的に部員の担当学年で分け、小学校で3つの部会、中学校で1つの部会の合計4部会を設定した。

- 5月 研究組織・研究テーマ・研究計画・実践報告時期や内容の決定
- 6月 各校の読書週間・旬間についての取組報告
- 7月 各校実践報告（委員会・授業等）
- 9月 尾教研愛日支部学校図書館教育研究集会準備
- 10月 尾教研愛日支部学校図書館教育研究集会
- 11月 村瀬真奈美先生による研修会
- 1月 小牧南小学校新図書館の見学および研修
- 2月 今年度の研究のまとめ

4 研究の概要

（1）全体会

図書室の運営や学校図書館司書さんとの連携など、各校共通の話題を取り上げて情報交換を行うとともに、尾教研愛日支部学校図書館教育研究集会に向けて準備を進めた。また、実践や研究のまとめを行った。11月には、村瀬真奈美先生に「言葉と子どもの出会い」についての講演をしていただき、子どもたちと言葉をつなぐきっかけづくりの方法や、本の魅力を伝える手段を学んだ。さらに、1月には小牧南小学校の新図書館の見学・研修会を開催

し、これからの学校図書館の在り方、運営上の工夫などを学んだ。

これらの貴重な経験を、各校における今後の読書活動の推進に生かしていけるようにしたい。

(2) 学年別部会

図書館や図書資料の活用促進を目指した実践報告を行った。授業の中での活用法や図書委員会の取組について新しい気づきがあり、今後の実践の幅や可能性が広がった。また、今年度は1学期中に実践報告を行ったため、二学期以降に早速実践する学校もあった。

(3) 小学校：読書旬間の活動実践

① 実践のねらいと仮説

ア 実践のねらい

- ・ 低学年の児童に比べ高学年の児童の図書室利用が少なく、高学年の児童を中心に、より多くの児童が主体的に読書に親しむことができるようにしたい。

イ 実践の仮説

- ・ 児童が「図書室に行きたい。」と思えるような魅力的な企画を計画・運営すれば、児童が主体的に読書に親しむことができるのではないかと。

② 実践の内容

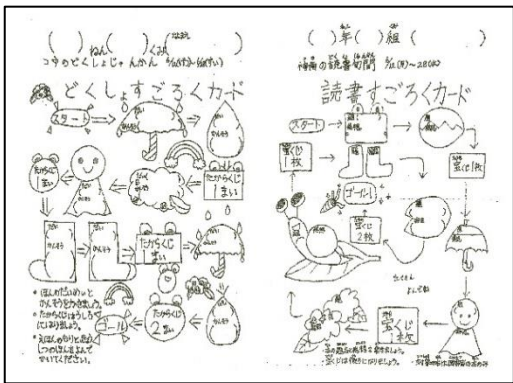
ア 実践の手立て

「読書すごろく宝くじ」の実施

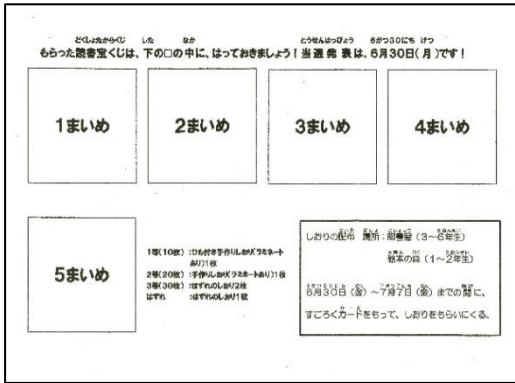
イ 具体的な実践内容

- ・ 図書室で借りた本を読み、本の題名と感想を書き込む「すごろくカード」を作成
まず、本とつながる魅力的な仕掛けとして、図書委員が「すごろくカード」を手書きで作成し、児童に配布した。(資料1)初の試みであったため、児童や職員への周知をしっかりと行ったうえで実施した。

「すごろくカード」は、6月の「梅雨の読書旬間」中に読んだ本の題名と感想を書くマスがあり、さらに途中にある「宝くじ」のマスでは、宝くじを引けるようになっている。中学年以上は、期間中に図書室で借りた本を対象としたが、低学年だけは、学級文庫の本も可とした。



左：低学年



右：高学年

〈資料1 「すごろくカード」〉

- ・ 図書室で読んだ本を返却する際に、図書委員に受けるチェック

「すごろくカード」に記入ができた
ら、返却する本とともに、図書室にいる
図書委員にカードを渡しに行き、図書委
員はカードに書かれた感想を読んでス
タンプを押す。そのスタンプがもらえ
たら、次のマスに進み、新しい本を読め
るという仕組みにした。また、図書委員
は、学年に応じた内容が書けているか
も考えながら、感想を読むようにした
ことと、スタンプは原則 1 日 1 個ま
でとしたことで、すごろくだけがメイ
ンにならないように配慮した。



〈写真 1 期間中の図書室の様子〉

期間中は図書室が非常に混雑することが予想されたため、バーコードリーダーとタブレットを併用して貸し出しや返却処理を行ったり、館内閲覧を禁止にしたりするなど、混雑の解消を図った。(写真 1)

・ 一定冊数（2 冊）読むごとにもらえる宝くじ

2 マス進むごとに登場する「宝くじ」
のマスでは、図書委員からスタンプを
もらった後に宝くじを 1 枚引き、カード
の裏面に貼れるようにした。(写真 2) 初
めの取り組みであったので、児童には新
鮮なようだった。宝くじを集めるという
ことが楽しかったようで、友達同士で何
番だったかを見せ合っている姿も見ら
れた。当選発表の日までに、「〇〇番はあ
たりですか?」「〇〇番をあたりにしてくだ
さい!」など、児童から声をかけられるこ
とも多く、非常に楽しんで取り組んでいる
様子が見られた。



〈写真 2 「宝くじ」を引く様子〉

・ 期間終了後に宝くじの当選番号を発表し、当選者にはしおりを配布

読書旬間終了後、全校集会で、宝くじの当選番号を発表した。発表はリ
モートで行い、児童は「すごろくカード」を手に持ちながら、呼ばれる番
号に聞き入っていた。全校が見守る中で発表を行ったことで、学校として
取り組んでいるという一体感を出すことができたと感じている。

③ 成果と課題

手立て 3 を実践した結果をまとめたものが資料 2 である。参加率を見ると高学年の参加率が著しく低いことが分かる。しかし、本の貸し出し数を調べると、読書旬間前の 13 日間（5/24～6/9）では 1121 冊だったが、読

書旬間中の13日間(6/12～6/28)では2209冊と、およそ2倍に増加した。また、1・2年生は、学級文庫の本も読んでいたことを踏まえると、数字以上の本が読まれていたと考えられる。

児童の様子を見ていると、すぐろくと宝くじに新鮮さや楽しさを感じ、主体的に読書に取り組む姿が見られた。一方で、参加率が高かった低学年では、期間中図書室が非常に混み合い、貸し出しが間に合わない様子も見られた。

本研究では、B小学校での実践を紹介したが、市内の多くの小学校で、子どもたちの読書活動を推進するために、読書週間等を設定している。図書委員による企画を実施したり、読書の時間を設けたりすることで、本に触れる機会を増やしている。読書期間中は、意欲的に企画に取り組んだり、本を読んだりすることができているが、一過性に過ぎないため、今後の課題としてどの児童も読書に親しむための手立てが必要であると考えられる。また、B小学校の実践でも見られたように、高学年の参加率が著しく低くなっている。「景品に魅力を感じられない」「読書への意欲が低い」「委員会や児童会活動の参加意識が低い」などの理由が考えられる。そのため、図書委員による企画を実施したり、読書の時間を設けたりして、本に触れる機会を増やすだけでなく、全員が本に触れられる機会の確保のために、授業における効果的な図書の活用が必要であると考えた。

クラス	在籍数	参加児童数	不参加児童数	参加率
1年1組	28	24	4	86%
1年2組	29	27	2	93%
1年3組	29	25	4	86%
2年1組	27	21	6	78%
2年2組	28	18	10	64%
2年3組	27	24	3	89%
3年1組	31	30	1	97%
3年2組	31	22	9	71%
3年3組	31	26	5	84%
4年1組	28	21	7	75%
4年2組	29	20	9	69%
4年3組	30	28	2	93%
5年1組	33	18	15	55%
5年2組	33	22	11	67%
5年3組	34	21	13	62%
6年1組	35	19	16	54%
6年2組	35	19	16	54%
6年3組	34	11	23	32%
特別支援学級	10	5	5	50%
合計	562	401	161	71%

〈資料2 児童の参加状況〉

(4) 中学校：委員会の実践

① 実践のねらいと仮説

ア 実践のねらい

- ・ 一人一台のタブレット端末の導入や朝読書の廃止等で読書機会が減少している生徒に対し、読書機会の提供と図書室利用を繋ぎたい。

イ 実践の仮説

- ・ 「図書室で本を借りる必要がある。」「手元に本がないと困る。」「図書室を利用すると助かる。」という状況であれば、図書室を利用する生徒が増加するのではないか。

② 実践の内容

ア 実践の手立て

- ・ 読書週間中毎日5分間の全校読書の実施
- ・ 読書感想文に向けた企画の実施

イ 具体的な実践内容

- ・ 期間中毎日 5 分間の全校読書を実施

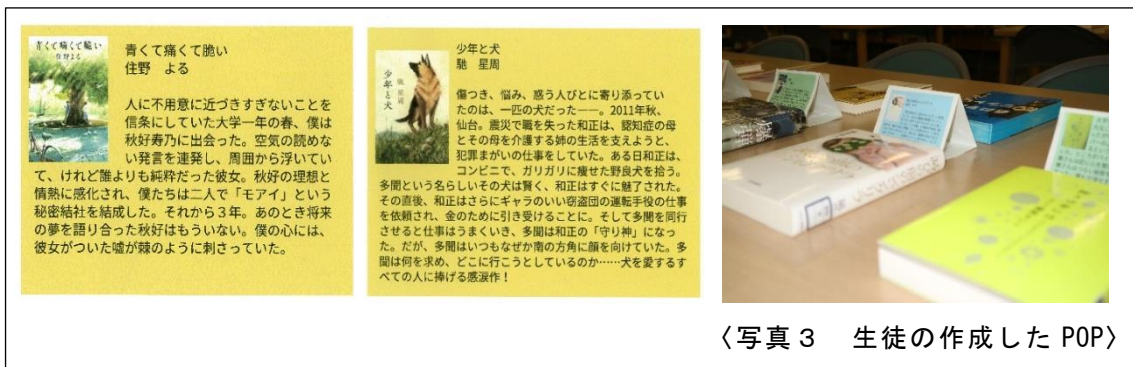
短時間ではあるものの、給食終了後の昼放課 5 分間を「読書タイム」と設定し、全校で読書をする時間とした。期間は読書週間中の一週間だけであったが、この 5 分間は黙々と読書をする生徒の姿も多く見られた。また、給食を早く食べ終えた生徒が、「読書タイム」に先行する形で読書する姿もあった。

一方で、本を持っていない生徒が図書室に本を借りに来るのではなく、教室に設置している学級文庫を読んでしまい、図書室まで足を運ばないという状況もあった。

- ・ 読書感想文におすすめの本を選書し、POP をつけて図書室内で平置き

図書委員で読書感想文を書きやすいようなテーマを 7 つ挙げ、テーマに合わせた書籍を選書し、机に平置きし手に取りやすいような配置をすると共に、本の内容紹介の POP を作成した。テーマは、「課題図書」「人間関係」「動物」「社会・国際問題」「歴史・事件」「スポーツ」「メディア化作品」の全 7 テーマとした。

図書委員は一人 2 冊選書をし、自分が選んだ本の POP を制作した。POP については、一人一台のタブレット端末で制作した。(写真 2)



〈写真 3 生徒の作成した POP〉

- ・ 原稿用紙や読書感想文の書き方のチラシの配布

本の紹介だけではなく、読書感想文に必要な原稿用紙や読書感想文コンクールの要項、書き方のポイントをまとめた資料を図書室内に用意し、来館した生徒が自由に手に取れるようにした。

- ・ 図書室内に読書感想文を書く机を設置

学校図書館の学習センターとしての側面を生かし、図書室内の座席を、読書感想文を書く場所として提供した。

③ 成果と課題

仮説 1 に対する手立てが、図書室へ足を運ぶ機会を増やすことに役立ったのか把握するために、期間前と期間中の図書室への来館者数と貸し出し数を調査した。(資料 3)

結果の通り、来館者数、貸出冊数ともに顕著な増加が見られた。特に来館者数は、キャンペーン期間前は 1 日平均 10 人にも満たない数であったが、キャンペーン期間中は、1 日目 43 人、2 日目 26 人、3 日目 31 人、

4 日目 36 人、5 日目 21 人と平均して 30 人程度が来館した。しかし、貸出数については、来館者数ほどの伸びは見られなかったが、学年別に貸出数を見てみると、3 年生の貸出数が 7 冊から 17 冊、23 冊とキャンペーン以前と比べると 3 倍以上に増加した。

貸出数があまり増えなかった要因として、図書委員が選書して平置きしていた本を、手にとったものの借りてしまっていいのかと迷っている生徒の様子が見られたことや、各クラスに配置している学級文庫の本を読んでいて、図書室まで足を伸ばそうとする生徒が減ってしまったことが反省として挙げられた。

今後の課題として、以上のような効果はキャンペーン期間中の一過性の側面が強く、継続的に読書に親しむ生徒の育成には繋がっていない。読書機会が減少している中学生という発達段階においては、読書を身近なものとして感じられる「仕掛け」を継続的に与えることが必要だと考えられる。

期間	来館者数	貸出冊数
6/5～6/9	39 人	22 冊
6/12～6/16 (閉館期間)	—	—
6/19～6/23	53 人	32 冊
6/26～6/30 キャンペーン告知	48 人	31 冊
7/3～7/7 キャンペーン期間	157 人	43 冊
7/10～7/14 キャンペーン期間	126 人	51 冊

〈資料 3 期間前と期間中の図書室利用者数〉

5 今後の課題

文部科学省が学校図書館の機能を「学校教育の一環として、すべての子どもに、本を選んで読む経験、読書に親しむきっかけを与える」「子どもたちが、自由に好きな本を選び、静かに読みふける場を提供したり、様々な本を紹介したりして、読書の楽しさを伝える。」と提言しているように、学校図書館に足を運んで、本を手にとってみる体験は、児童生徒には欠かせることのできないものである。

今後は教室や廊下などに図書を配置し、より一層手軽に本を手にとることができる環境を作ったり、授業の中で図書を利用する機会を増やしたりして、本を児童生徒にとって身近なものにする必要があると考える。また、GIGA スクール構想により一人一台のタブレット端末も導入され、電子書籍の利用やオンラインでの蔵書検索などデジタル面でも図書との関わりが手軽になっていくことも考えられる。

一方で、本に関わる活動を取り入れたり、本を読むきっかけを与えたりすることで増える利用者は一過性であることも、今回の研究で課題として浮かび上がってきた。継続的に「仕掛け」を与え続けるとともに、本の本質的な魅力を感じさせながら、より主体的に本と関わる児童生徒の育成を目指していきたい。